

氏名	川 崎 明 徳
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 138 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和40年 9 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学 位 論 文 題 目	悪性腫瘍に対する制癌剤の局所灌流療法に関する実験的 並びに臨床的研究
論 文 審 査 委 員	教授 砂 田 輝 武 教授 田 中 早 苗 教授 山 崎 英 正

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

小型人工心肺装置を用い、悪性腫瘍に対する局所灌流療法について、薬剤の組織許容量、酸素加、灌流域温度、組織固着等について検索を行った。又 R I S A, P³²標識Tespamin, Mitomycin C微量定量法の3法で灌流血中制癌剤濃度並びに漏出率の測定を行い、ついで家兎後肢移植 Brown-Pearce 腫瘍をもちい本法の腫瘍効果（組織学的）を追検した。本法の臨床応用例は29例（37回）で、13例は根治手術を併用し、16例は姑息療法として本法を施行し、その際臨床効果、副作用、遠隔成績等について検討を加えた。

論文審査の結果の要旨

川崎明德提出の「悪性腫瘍に対する制癌剤の局所灌流療法に関する実験的並びに臨床的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

制癌剤は全身投与の場合その副作用が大で充分な量の投与は困難である。そこで著者は腫瘍を含む身体の一部を体循環より隔離して、その領域の動、静脈を人工心肺装置に連結し、回路中に高濃度の制癌剤を投与する方法即ち制癌剤の局所灌流療法を行い、その方法、効果を検討した。本研究は本法について日本で最初に行われたものである。その成績を述べると、まず犬を用いて基礎的実験を行い、各種制癌剤の最大組織許容量をきめた後、四肢では30分灌流においては酸素附加の不要なこと、40°Cの高温、5°Cの低温では正常組織の障害の強いこと、灌流血中濃度並びに漏出率の測定では R I S A による測定は正確でないこと、制癌剤灌流後可逆性の組織固着があること、薬剤は分割投与がのぞましいこと等を認め、ついで臨床例29例（37回）に本法を応用し、副作用が比較的少なく、効果の判定はむつかしいが、根治手術不能例に延命効果をかなりに認めた。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。